

カンボジア軍の教育体験記

常務理事兼事務局長 中村 弘

1 はじめに

一月一日(元旦)早朝、成田を離陸した航空機は、途中ベトナムのホーチミン市を經由、同日夕、カンボジアの首都プノンペン空港に到着した。空港を一步出るや、日本との気温差に驚くと同時に、正月とは言え真夏の蒸し暑さ、自転車、バイク、トゥクトゥク^{注1)}、車の洪水と雑然とした街並みがまず目に飛び込んできた。

現地における教育準備期間を含めてこれから約3か月間、教育に任ずる国を目の当たりにした時、我が国との乖離の大きさに期待と不安が瞬間的に交錯した。

周知のように、今から約20年前、我が国が最初の国連PKO活動として1年間に亘り陸上自衛隊施設大隊約600人を派遣し、タケオを基盤に国造りに貢献したのがカンボジア国である。また、本年は、日本・カンボジア外交関係樹立60周年に当たる記念すべき年でもある。

カンボジア訪問は初めてであり、私の仕事(任務)は、防衛省・自衛隊からの派遣要員と協力して民間団体の一員(教官)として、カンボジア軍の将校等に対して、「PKO分野の能力向上に関する人材育成」の教育を実施することである。

本教育は、防衛省が平成24年度から始めた新規事業であり、読者の方にも余り馴染みのない分野と思われるので、事業の概要と教官として参加した教育の実情と所感、約1か月半の短期滞在ではあったが昨今のプノンペン寸評を紹介して参考に供したいと思う。

2 能力構築支援(CBS:キャパシティ・ビルディング・サポート)

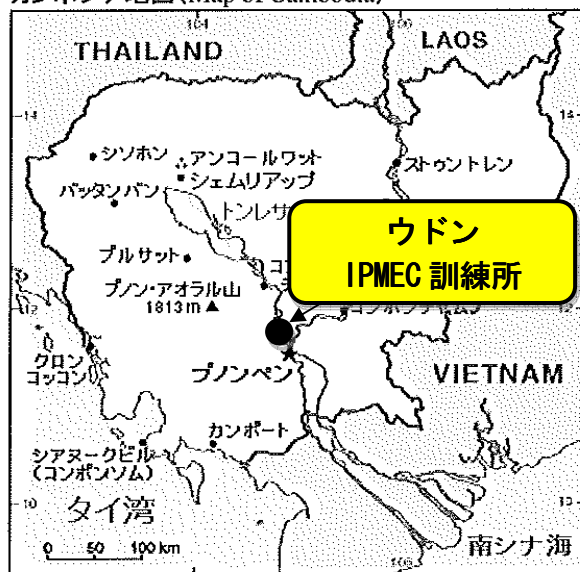
わが国を巡る安全保障環境を踏まえ、防衛省は、「近年、人道支援・災害救援、地雷・不発弾処理、防衛医学などの非伝統的安全保障分野における防衛の役割や協力が拡大し、特に、国際社会が協力し、これらの分野で関係国の能力を構築させることが必要となっている。

これらを踏まえて、新防衛大綱では、自衛隊が有する能力を活用し、具体的・実質的な協力を推進、域内協力枠組の構築・強化や域内諸国の能力構築支援に取り込むとされている。

特に、東南アジア諸国からは、非伝統的安全保障分野における自国の対処能力に期待が大きく、防衛省・自衛隊としても、自ら有する知見や経験等を用いることで、関係国の能力向上や人材育成に積極的に取り組む必要がある。」との認識に立ち、平成24年度から新規に開始したのが能力構築支援である。

支援は複数国に対して実施されており、その内容や規模も異なっているが、支援対象国によって、民間団定要員が参加あるいは不参加の場合があり、以下報告するカンボジアでは、最多の民間団定要員が参加(協力)したのが特徴と言える。

カンボジア地図 (Map of Cambodia)



3 カンボジア能力構築支援について

カンボジア能力構築支援の具体的な内容は、「PKO 分野の能力向上に資する道路構築等の施設分野に関する人材の養成」である。

事業は、防衛省・自衛隊が民間団体(NGO 等)と協力(契約)して行う体制であり、カンボジアの場合、同国に知見と経験を有する陸自 OB らが作る認定 NPO 法人「日本地雷処理を支援する会」(JMAS)が協力することになった。

支援対象は、プノンペン市内にある PKO センターの NPMEC ^{注2)}(国家平和維持・地雷処理爆発性残存物除去センター:センター長 ソバンニー陸軍中将)の隷下組織たる IPMEC ^{注3)}(平和維持部隊及び地雷・不発弾処理訓練所)である。

IPMEC は、首都プノンペンから国道 5 号を北へ約 40Km、車で約 1 時間の都市ウドンにある。ウドンは、プノンペンへ首都が移るまでの間カンボジアの首都であった小都市である。

カンボジアに対する諸外国の支援は非常に活発であり、私達が 1 月 2 日に IPMEC を最初に訪問した際、既にフランス軍が憲兵とフランス語を教育中であり、2 月から米軍が参謀訓練支援を実施予定であるとのことであった。

4 教育の実情

まず、教育内容、特に、教育課目は、工事管理基礎、土木施工基礎、土木機械施工基礎、道路作業、応用固定橋、総合実習の 6 課目からなり、陸上自衛官 4 名と民間団体要員(教官)4 名が担当し、教育全体時間の 8 割強は民間団体教官 4 名が分担して行うこととなった。教育目的、内容からして、民間団体の教官は全て職種「施設科」幹部で道路構築等に実経験を有する OB が任に当たった。

私は、土木施工基礎の「構造力学」と応用固定橋の「橋梁概説」と「橋梁の設計・見積」を担当したが、仕事の関係から現地滞在が 2 月中旬までと限定されており、担当3課目に関する講義を、全体教育期間の前半部に集中して行うことになり、かなりハードなスケジュールとなった。

1 月 24 日に IPMEC の講堂で行われた開講式には、ブラック・ソコン首相補佐特命大臣、黒木駐カンボジア大使、防衛省から防衛政策局次長をはじめ国内外から約 200 人が出席し、翌 25 日から早速教育が開始された。



写真1 開講式の様子

現地の 1 月～2 月は乾季とは言え日中の気温は 37～38℃になり、クーラーのない教場では午後の授業は厳しいものとなったが、受講者の授業態度は熱心かつ立派であった。

これは暑さに慣れているばかりでなく、「自分達は部隊の代表である。」「教育から何かを掴みたい。」との気持ちが強かったと思っている。

ただ、課目によって差はあるが、「土木に関する基礎」を理解するためには、ある程度の数学の知識が不可欠であるが、この分野がかなり低く授業に苦勞したのは教官全員の所見であった。

そこで、これを克服するために、予備時間を利用して「基礎数学補講」を実施すると共に、各科目の授業では、限られた時間の中で「努めてわかり易く、かつ、丁寧に説明する。」「各授業の終了後、演習問題(宿題)を与え、理解度を確認する。」「課目終了後の結節時、小試験を実施する。」ことにした。この方式を採用することにより、開講式直後の素養試験に較べて、小試験の結果が全体的にかなり向上しており、多少安堵した次第である。

今回は初回事業でもあり「座学主体」の教育であったが、PKO 活動は「実践(行動)」そのものであり、将来的には「実教育(現場教育)による能力向上」を錬成することが重要となろう。

次に、教育環境について簡単に触れておくと、IPMEC 施設は周辺の一一般の民家に比して立派

ではあったが、構内の停電は当たり前、トイレの断水は度々で苦労した。

この原因は定かではないが、カンボジアの絶対的電気供給量と給水能力の不足と思われる。特に、停電はパソコン等の電子機器を使用する教育では致命傷となることから、日本側で自ら発電発電機を設置し予備電源として使用した。

また、受講生は、教育期間中は週末を除いて全員が IPMEC 施設に居住し、その位置も教場と同じ建物内にあり、彼らは我が国と異なり長めの昼食休憩時間に昼寝をしたり、建物裏のコンクリート製水槽の溜め水(浄水能力の関係で薄い色がついた水道水)で体を洗ったりしている光景(柄杓で溜め水を頭から身体にかける手動シャワー)を目の当たりにし、習慣の違いに驚いた。



写真2 教育の状況

5 プノンペン寸評

プノンペンは、カンボジア南部のメコン川とトンレ・サップ川の合流点に位置し、人口約 230 万人の首都特別市である。街の中心部では所々近代的な高層ビルの建設が進んでいる反面、フランス占領時代の名残を残す建物や多くの旧家屋が雑然と並んでいる。トンレ・サップ川沿いには、芝生や遊歩道が整備されて、ホテルやレストラン等が立ち並び観光客で賑わっており、丁度遊歩道の中央付近に王宮(Royal Palace)がある。幹線道路から一歩入れば様相は一変、道路は狭く、老朽化した建物に挟まれた街となり、街角や空き地には塵が散乱し、場所によっては異臭が漂っている状況である。

夕方ともなれば、街のいたる所でプノンペン名物の露店が軒を並べる。店は、歩道も関係なく開店し、辺りに肉を焼く香ばしい匂いが漂う。通常は、カンボジア料理で値段も安い、調理と食器洗浄の水はバケツ一杯が当たり前、かつ、雑踏の埃の中で食することから、私達の感覚からすれば極めて勇気がある。現地人は、当たりの事であり、平素の鍛錬でこうも違うのかと嘆息する。また、朝には、大概、道端の店が朝食の場となり、地元の人が大勢利用している。

また、市内には主要な交差点を除いて信号や横断歩道がないので、朝夕のラッシュ時に道路を横切るのは命がけで、バイク中心とした車両のドライバーと横断する人が「阿吽の呼吸」でお互いに譲り合って事故があまり起きないのはカンボジア人の生活の知恵かもしれない。渋滞で車が停止すれば、昼夜を問わず窓越しに物貰いが近づいて来るのには閉口した。このように、人と車が微妙なバランスの上に成り立っているのは、正にカンボジア流儀であろう。

官庁やビジネス関係者を除き、男も女も「ゴム草履」姿、バイクには3～4人、トラック荷台はテント盛りでその上に人も乗車、現地では通常のことであり慣れれば怖くないのか不思議である。このように、カンボジアは全てが「日本人の尺度」では測れないことが多い国であるが、それでも、同国を再三訪問されている方からは、「どんどん進歩・発展している国」との評価であり、近い将来に近代カンボジアが誕生するかもしれない。

最後に、現地滞在間の2月4日、王宮で昨年10月に逝去されたシハヌーク前国王の国葬があり、世界各国から多くの皇族や高官等が参列されたが（日本からは秋篠宮殿下が出席）、周辺一帯は警備が厳しく近づくことが出来ず現地テレビで中継を見たが、国民等しく喪に服し市内は実に静かな一日となった。

6 おわりに

昨年の初夏、知人からカンボジアで土木の基礎教育をして呉れないかとのお話があり、予想もしない事で大変戸惑ったのを鮮明に思い出されます。いろいろ関係者から説明を受けるにつれて、浅学菲才の身ではあるが「開発途上国、それも軍人の能力向上」に資する事業に参加することは意義あることと思ひ参加を決断し、微力ではありましたが何とか自分の職責を少しは果たせたのかと考えています。

これも国内外に於ける教育準備や現地における教育にご理解とご支援を頂いたカンボジア政府、防衛省、日本地雷処理を支援する会をはじめ関係者のお陰であると感謝しております。

今後は、このような「平素からの非伝統的安全保障」に関する事業が、地域的、内容的にも益々充実・発展して行くことを期待しつつ報告と致します。

(平成25年3月12日記)